

## 第1部

### 被災地の女子中学生が作成した紙芝居～実演と活動報告～

紙芝居を作成した石巻市立門脇中学校の皆さんほか

金谷 邦彦（紙芝居師）

コーディネーター 田中 正人（財団法人人権教育啓発推進センター理事）

#### 【田中】

連休初日にもかかわらず、会場があふれんばかりの方々にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

はじめに、本日のシンポジウムのメインイベントであります紙芝居を、11人の児童、生徒の方々にやっていただきます。11人の方は被災体験者であり、その紙芝居はある



日の夜、一晩で自発的に避難所体育館の調理室で描き上げたという、素晴らしい作品です。おそらくこの1年間、全国の紙芝居でこれほど話題になった紙芝居は他にないのではないかと思います。

実際に私ども人権教育啓発推進センターにも、あるプロの紙芝居の方から「この紙芝居の話聞いたのだが、様々なところで紙芝居をやっているのだから、貸してもらえないだろうか」、というご相談がありました。それは丁重にお断りさせていただきましたが、多分、様々なところで、この1年間評判になっている紙芝居ではないだろうかと思います。

そして、また、この紙芝居が登場するきっかけになった、紙芝居の生みの親と言ってもよいと思いますが、金谷邦彦さんにも、後ほどお話をお聞きしたいと思います。



それでは、これから紙芝居を実演していただきます。紙芝居は全12枚ございますので、11枚までを一人1枚ずつ読んでいただきます。阿部菜波さん、亀山矩佳さん、加賀智美さん、木村杏奈さん、菊地珠生さん、菊地絢女さん、近藤沙也果さん、阿部瑞生さん、菊地未准さん、淀川雅陽さん、近藤優さん、この順番で紙芝居の語りの部分を読んでいただきまして、最後の12枚目を全員で読んでいただきます。

それでは、皆さん、これから紙芝居をお願いいたします。

【阿部瑞生】

これから紙芝居を始めます。(拍子木を鳴らす音)



【阿部菜波】

3月11日午後2時46分55秒、東日本大震災が発生しました。そのとき、周りには人の声や子どもの泣き声でいっぱいでした。家ではテレビが倒れ、食器が割れ、そのほか、いろいろなものが床に散乱していました。近所の人たちとお互いの無事を確認し合いました。また、電線が落ちていたり、電中が倒れそうになっていたり、ふだんの地震では絶対あり得ないことがたくさんありました。そして、少しすると雪が降ってきて、寒さに震えていました。



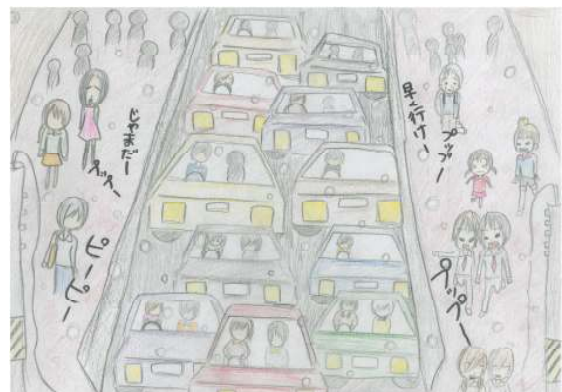
【亀山矩佳】

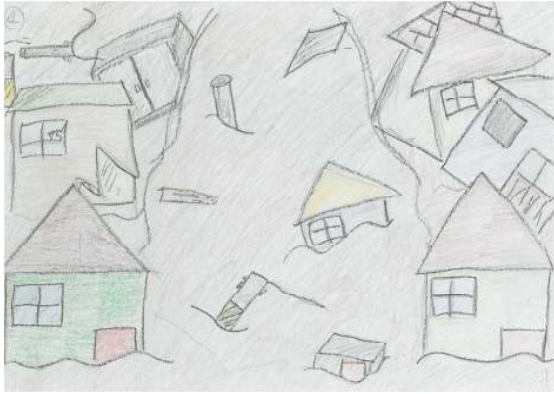
町では、家で落ちたものを片づけていた人、大切なものを取りに家に戻る人、学校にいる子どもを迎えに行く人などがいました。このころは、みんな、大津波が来るとは思っていませんでした。



【加賀智美】

しかし、何分後かに大津波警報が発令されました。町は、逃げ惑う人々でごった返し、道路は、高いところに逃げようとする人たちの車で混んでいました。全然進まない車に、いら立ちと焦りを感じた人々は、車のクラクションを鳴らしたり、暴言を言ったりしていました。





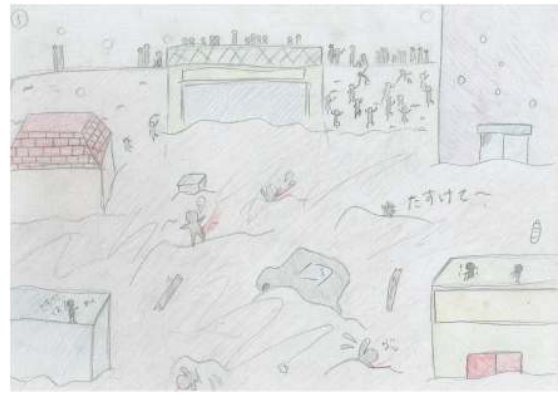
【木村杏奈】

すると、後ろのほうから、ものすごい音とともに、大きな黒い影が迫ってきました。あっという間に家や車、ごみ、人などが一遍に流されました。



【菊地珠生】

走って逃げた人は、急いで高台に避難しましたが、少し遅れた人や老人の人たちは、そのまま波にのみ込まれてしまいました。避難したはいいものの、屋根に取り残されて、身動きがとれない人もいました。そのほかのごみや木、泥などが散乱していて、町じゅうはめちゃくちゃの状態でした。



【菊地絢女】

波のせいで、流された車や家が衝突して、大爆発が起きました。ものすごい音が出て、見る見るうちに家などに燃え移りました。



【近藤沙也果】

炎は次々に燃え移り、町全体が火の海となりました。ものすごい煙を上げ、町が灰色で見えなくなりました。





【阿部瑞生】

津波から逃げ、高台に避難した人たちは、すごく不安な気持ちや恐怖で胸がいっぱいでした。電気も水も使えない中、みんなは考えました。「そうだ。学校のプールから水をくもう」

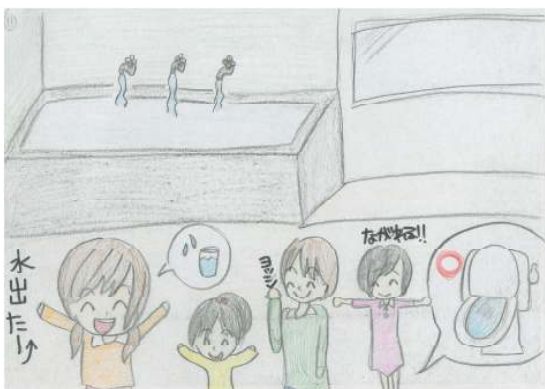
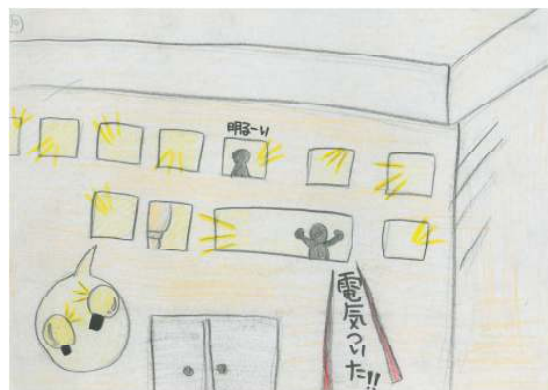


【菊地未准】

最初のほうは、中学生などがトイレまで運んでいました。すると、みんなが集まってきて、バケツリレーを始めました。そのとき、知らない人たちが集まったのに、ひとつになれたように感じました。その後も、みんなで協力しながら生活していると……

【淀川雅陽】

やっとのことで電気がつきました。みんなはとても喜び、涙ぐむ人や、大きな声で喜ぶ人もいました。電気がついたことで、部屋も明るくなり、とても助かりました。トイレなども明るく、掃除などがしやすくなりました。でも、まだ水が出ないので、トイレなどが流せず大変でした。その何週間後……



【近藤優】

「水が出るようになりました」と、放送が鳴りました。みんなはとても喜びました。水が出たおかげで、とても助かりました。飲み水もでき、トイレも流せるようになりました、きれいになりました。その後も、いろんな県から物資をもらい、生活がよくなりました。

【子どもたち一同】

そして、今、私たちは皆さんからの力をかりて、早く復興できるように頑張っています。私たちは、地震を経験してよかったです。



みんなと助け合うこと、みんなとひとつになること、食べ物大切さを知ることが学びました。みんなが笑顔になれるよう、これからも遠くから応援しててください。ほんとうにありがとうございました。そして、これからも頑張ります。(拍手)

【田中】

皆さん、ありがとう。ご苦労さまでした。どうぞ座ってください。

11人の皆さんは、正確に申し上げますと、中学2年生の方が9人、中学1年生がお一人、小学校5年生がお一人という方々です。

これから、みなさんにもう一度お話ししてもらいます。この紙芝居ができるまでのいきさつとか、金谷さんとの最初の出会いでも構わないし、本日ここへ来ての感想でもよいので、一人ずつ、今の紙芝居の順番で話をしてくれませんか。

【阿部菜波】

3月11日の震災で、私たちはたくさんを経験し、この場を借りて、少しでも多く皆さんに伝えられてよかったです。またこのような地震が起きたとき、今回経験したことを少しでも活かしてください。本日はありがとうございました。



**【亀山矩佳】**

私たちは、東日本大震災を経験して、紙芝居にして、このような場で発表できてよかったです。皆さんに、この紙芝居で、3月11日のことを少しでも知ってもらえればいいと思います。これからも復興に向けてみんなで頑張っていきますので、見守ってってください。本日はありがとうございました。



**【加賀智美】**

本日、このシンポジウムを通して、たくさんの方々に、紙芝居を通して震災のことを伝えることができましたと思います。この震災の教訓を忘れず、少しでも早く復興できるように頑張っていきますので、応援よろしくお願いします。本日はありがとうございました。

**【木村杏奈】**

私たちがつくった紙芝居を、こんなにたくさんの人たちに見てもらって、とてもうれしいです。これからも私たちはこの震災のことを忘れずに頑張りたいです。本日はありがとうございました。



**【菊地珠生】**

私たちが体験したことを、こうして紙芝居でたくさんの方々に伝えることができ、非常にうれしいです。この紙芝居を見て、少しでも何か感じてもらえたらいいです。本日はありがとうございました。

**【菊地絢女】**

私たちは、様々な支援、応援のメッセージなどをもらいました。ですから、支援や応援をしてくれたお返しに、気持ちを込めて、あのときの出来事を紙芝居にまとめました。本日、様々な人に紙芝居を伝えられたので、うれしかったです。支援をしてくれた皆さん、ありがとうございました。





【近藤沙也果】

3月11日に起こった震災のことを、この紙芝居を通してたくさんの方に知っていただき、ずっと覚えていてほしいです。皆さんからの支援をいただいて頑張っているの、これからも応援していただければうれしいです。本日はありがとうございました。

【阿部瑞生】

私たちが紙芝居を書いたのは、3月11日にあった東日本大震災で経験したことを多くの人たちに伝えたかったからです。この震災に遭って初めて経験したことや学んだことを、この場で発表できてよかったです。一人でも多くの皆さんにこの紙芝居を見ていただいて、皆さんの記憶から消えていかないように、ずっと覚えていてほしいと思います。そして、私たちが早く元の石巻に戻るよう頑張っていくので、応援してってください。本日はありがとうございました。



【菊地未准】

私たちが東日本大震災で経験したことを、このような形で自分たちから皆さんに伝えることができ、うれしいです。これからも、皆さんの優しさや支えを忘れずに、復興へ向けて頑張りたいと思います。本日はありがとうございました。

【淀川雅陽】

私たちは、多くの地方の方々に3月11日の震災のことを知っていただきたいと思って、この紙芝居を書きました。私たちが書いた紙芝居を通して、震災のことを思い出したり、震災で起こったことをたくさん知ったりしていただけたらうれしいです。私たちは、これから震災で起こったことを乗り越えて、よりよい宮城県をつくっていかたいと思います。他県の皆さんの力を借りて、これからも頑張っていきます。本日はありがとうございました。





### 【近藤優】

今回は、このような場で私たちがつくった紙芝居を読ませていただき、ありがとうございます。3月11日の震災で、様々なものを失ったりして、つらいこともありましたが、このように紙芝居で皆さんに知ってもらえることができ、とてもうれしいです。3月11日の震災で、つらいこともたくさんありましたが、今となっては、大切なものを教えてくれたと思います。これからも頑張っていくので、応援、よろしくお願いします。



### 【田中】

皆さん、どうもありがとう。疲れたでしょう。ありがとうございました。

実は、この「震災と人権」という総合タイトルのシンポジウムは、昨年10月の東京、今年1月の大阪、そしてこの度の仙台での開催と、3回目になりました。東京と大阪で開催しました際も、金谷さんに大変ご尽力いただきまして、先ほど登場した子どもさん方にも来ていただこうと何回も努力いたしましたが、最初の10月は、当日が文化祭だったようで、これは叶いませんでした。そして、行政の区切りで言いますと、今年度末、いよいよぎりぎりになって、こちら宮城県で開催することができて、こうやって作成者である子どもさん方にも登場していただくことができました。何よりのシンポジウムになったのではないかと思います。これも、もちろん金谷さんに大変ご尽力いただきましたが、加賀さんから、一にかかって、この11人のみなさんの親御さん方のご了解がなかったら、ここまでできなかったのではないだろうかと思っております。

私の独断ではございますが、保護者の方が何人か来ていただいておりますが、加賀さんから一言何か感想をいただきたいと思っております。

### 【加賀（母）】

こんにちは。

私は、実際のところ、紙芝居を作成しているところを見ていません。ですので、後からこの紙芝居のことを聞いて、びっくりしました。

子どもたちは、金谷さんという紙芝居師の方とお会いできて、このようなすばらしい紙芝居を作成することができました。避難所の暗い中、一晩で肩を寄せ合って絵を描き、言葉をつけ、そしてお手紙を書いたことを聞いた時、子どもたちがどのような思いで紙芝居を作ったのかと思うと、心が痛みます。





しかし、こんなにたくさんの方に見て、聴いていただき、そしてまた全国に発信させていただき、作った甲斐があったのだと思います。

これからも、この子どもたちは、成長していくにつれて、様々な問題があります。ですが、この震災を経験したたくましい子どもたちでありますので、どんな悩みも解決し、大きく乗り越えていけることを確信しております。

今後もよろしく願いいたします。

【田中】

ありがとうございました。

さて、この紙芝居で忘れてならないのが、再三申し上げておりますように、生みの親の金谷邦彦さんでいらっしゃるかと思います。金谷さんに少しお話を伺います。

私がお聞きした限りでは、この子どもたちと出会ったのも、紙芝居が誕生したのも、一言で言うと偶然ですか。

【金谷】

そうなのです。

【田中】

率直に言うと、最初は信じておられなかった。

【金谷】

そうです。偶然の出会いです。だから、人というものは、出会いが非常に重要なのだな、ということです。

【田中】

そのきっかけを、簡単にご説明ください。

【金谷】

私は、東京で紙芝居師として活動しております金谷邦彦と申します。

4月の下旬、ちょうど紙芝居をボランティアで公演するために、(宮城県)石巻市を訪れました。その際、現地滞在中はレンタカーの後部座席に寝袋で寝ていたのです。門脇中学校の横で寝ておまして、朝起きましたら、この中学生の子どもたちが、偶然、朝の練習を終わって通りかかったのです。そこで声をかけてやりとりしているうち、紙芝居に少し興味を持ったようでした。



大変な状況ですから、こちらから描いてほしいと頼んだつもりはないのです。ただ、紙がちょうど手元にありましたので、「これ、描いてみる？」と渡したのです。そして次の日にこの場所をまた通るので、もし描いていたらその時に私に渡してほしい。もし描けなかったらそれで構わない。ただ通り過ぎるだけですから」と言っていたのです。すると、皆さんが1日で描き上げて、その紙芝居を持って現れて、待っていてくれたのです。ただそれだけなのです。

ということは、ここにいる生徒さんたちは、あの時に、今発表したようなテーマを心に持っていたのです。震災に遭ったことによって、生きるということ、そのようなテーマを皆さん持っていたのです。それがたまたま私との出会いの中で、あふれ出さんばかりの思いが、このような作品になったのです。

この作品はすごい力を持っていますが、東京をはじめどこで公演しても、震災への関心はどんどん薄れてきています。それが、この人権センターの手によって、去年の後半に40枚の紙芝居やメッセージがパネル化されて、全国に発信されました。そしていま、被災地であるここ仙台で、子どもたちの手によって公開されることになった。これは非常に感慨深いことです。

また、全国でこの子どもたちの紙芝居を手がかりにして、もう一度今回の震災を考えるきっかけづくりが行われています。よって、これは非常に大きいことだと思います。

さらに、これだけで終わらせてしまうのではなく、せっかく子どもたちがこれだけのテーマを持っているのだから、子どもたちがいまどのように考えて、震災の復興をどのようにとらえているのかを、子どもたちと私との関係の中で発展させて、それを復興・復旧に役に立てる、また、震災を忘れさせない、風化させないということの大きな力にしていければいいと思います。そのために、私も被災地にまた足を運ばせていただこうと思います。

本日はありがとうございました。

【田中】

金谷さんは、子どもさんたちに、紙芝居、それから、ほかの絵やメッセージを、10年経ったら返す、10年間預かるとおっしゃったそうですね。

【金谷】

そうなのです。

【田中】

ということは、10年間は最低つき合うということですか。

【金谷】

そうです。10年経ったら、この子どもたち以外の子どもたちも含めて、私に寄せてく

れたすべての原作をお返しします。

ということは、10年間おつき合いをしましょう、という暗示なのです。ですから、私は何回も何回も足を運んで重ねて、その中でまたそのような出会いの中で生まれてきたものを大切にしております。というのは、この子どもたちがこれから石巻、あるいは仙台でも、被災地を背負って立つわけですから、その時のことを一緒になって10年間考えてみようという、私からの暗黙のメッセージなのです。それを皆さんがどのように受け取るかはわかりませんが、そのようなことで、10年経ったら原作を返すという約束をしております。

### 【田中】

ありがとうございました。

生徒の皆さん、もう一度立っていただけますか。ありがとうございました。どうぞ、皆さん、もう一度拍手をお願いいたします。(拍手)



#### 【資料展示風景】

(上)全国の地方公共団体等が作成した人権啓発資料

(右)被災地の子どもたちが作った紙芝居&メッセージ

(下)仙台市立八軒中学校吹奏楽・合唱部の「全国中学生人権作文コンテスト宮城県大会表彰式」での公演風景の上映

